

九月定例能番組

令和二年九月六日(日) 午後一時始
於 石川県立能樂堂

(能)

子方原 一寿

シテ 藪 俊彦

自然居士

ワキ 平木 豊男

ワキツレ 渡貫 多聞

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 住駒 幸英

笛 江野 泉

間能村 祐丞

後見 渡邊荀之助
福岡 聡子

地謡

船本 嘉人 佐野 弘宜
長野 裕 高橋 右任
山崎 健 高橋 憲正
松本 博 木谷 哲也

休憩 二十分

(連吟)

半部

寺田 茂
中村 清
岩井 嘉樹
水口 純治

附子

(狂言)

太郎冠者 山田 讓二

主人 荒井 亮吉
次郎冠者 中尾 史生

後見 清水 宗治

(能)

シテ 松田 若子

ワキ 北島 公之

ワキツレ 渡貫 多聞

大鼓 田中 一義
小鼓 住駒 俊介
太鼓 飯森 友春
笛 室石 和夫

来

間炭 光太郎

後見 佐野 由於
広島 克栄

地謡

高野 秀幸 佐野 玄宜
谷 清士 島村 明宏
田屋 邦夫 渡邊 茂人
木谷 哲也 藪 克徳

終了 午後四時頃

能 自然居士 (じねんこじ)

東山雲居寺で説法する自然居士(シテ)に諷誦文を上げる少女(子方)がありました。両親の追善供養のために身売りして得た小袖を布施に上げたと知り、涙に袖を濡らさない人はいません。そこへ少女を買い取った人商人(ワキ・ワキツレ)が来て、少女を引立てて行きます。事情を推量して説法を中断した自然居士は、小袖を手に少女の行方を追います。東国へ向かう人商人たちはすでに舟に乗り、琵琶湖の東岸へ漕ぎ出していました。その舟を呼び止めて舟端に取り付いたのが、我らが自然居士です。人商人は腹いせに、猿轡をはめた少女を櫓で散々に打ちます。舟に乗り込んだ自然居士は人商人に小袖を返し、少女を引き取ろうとします。命を取るとすごまれても、少しも怯むことはありません。あきれた人商人は自然居士に次々と芸の披露を所望してなぶることにします。無理な注文にも自然居士は涼しく応じて、芸尽くしの果てに少女を取り返し、みごと都に連れ帰ります。

狂言 附子 (ぶす)

附子から吹く風に当たるだけでも身が滅却するほどの大毒、近づくなと主人に言い置かれても、興味津々の太郎冠者は次郎冠者に扇がせて風を防ぎ、ついに蓋を取り、魅せられたように食してしまいます。附子とは砂糖のことでありました。二人して平らげてから言い訳の算段、「留守番に眠るまいと相撲を取り、大事の掛け物、大天目を壊してしまいました、おわびに附子を食べましたがまだ死ねません」と泣き交わして主人に叱られます。

能 来 殿 (らいでん)

比叡山延暦寺の座主、法性坊の律師僧正たち(ワキ・ワキツレ)が天下の祈禱のため百座の護摩を焚き、満参の今日は仁王会を執行するところへ、深更になつて柴の戸を敲く者(前シテ)があります。管丞相道真の姿と見た僧正は庵の内へ入れますが、丞相は筑紫で亡くなり、僧正は種々の吊いをしたはずです。丞相と見えたのはその霊でしたが、霊は幼時以来の師の恩を回顧し、丁重に謝辞を述べます。しかし霊が成仏できていないのは、藤原時平の讒奏によって無実の罪を蒙った恨みが尽きないからです。僧正が応じる間もなく、霊は供物の柘榴を取り、噛み砕いて妻戸にくわっと吐きかけ、火災を燃え上がらせます。僧正は騒がず灑水の印を結び、鏡字の明を唱えて火災を消し、霊も煙に紛れて消え失せます(中入)。さらに奇特を待つ僧正の耳には妙なる音楽が聞こえ、大富天神(後シテ)が出現します。天神は神号を賜った君恩に感謝しつつ舞い遊び、北野に遷座します。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 令和二年十月四日(日)午後一時始

(能) 梅 枝

(狂言) 謀生種

(能) 土 蜘蛛